

## 東京通信

## 「日和下駄」から

『荷風随筆集上』

岩波文庫

## 八木三男

根津の隣町千駄木の団子坂は急勾配である。両側には高層のマンションが建ち並んでいるが、間口が二間にも満たない傾き加減の骨董屋もある。そば猪口を並べた小さなショールウィンドーから中をのぞくと、半開きになった障子戸の奥に親爺らしい年寄の肩口がみえた。

坂を登りつめたあたりで左に折れて崖沿いの小径に入るとすぐ、鷗外の観潮楼の趾があった。門柱の土台石だけが残っていた。屋敷趾から団子坂にかけて鷗外記念の図書館になっている。

この崖沿いの小径を鷗外を訪ねた荷風が歩いている。「片側は樹と竹藪に蔽われて昼なお暗く、片側はわが歩む道さえ

崩れ落ちはせぬかと危まれるばかり、足下を覗くと崖の中腹に生えた樹々の梢を透して谷底のような低い処にある人家の屋根が小さく見える」「市街が一目に見晴らされ其処より起る雑然たる巷の物音が距離のために柔げられて、かのヴェルレーヌが詩に、

かの平和なる物のひびきは

街より来る……

といったような心持を起こさせる。」

いまは崖も見えないし、巷も見下ろせない、聞こえるのは洪水のような車の騒音である。当時は「観潮楼」の字義通りに、市中の屋根を越して遙かに海を眺望できたのである。

「千駄木の崖上から見る彼の広漠たる市中の眺望は、今しも蒼然たる暮靄に包まれ一面に煙り渡つた底から、数知れぬ燈火を輝かし、雲の如き上野谷中の森の上には淡い黄昏の微光をば夢のように残していた。私はシャワンの描いた聖女ジエネヴィエーブが静に巴里の夜景を見下している、かのパンテオンの壁面の神秘

なる灰色の色彩を思出」す。

この文章は観潮楼で「当代の碩学鷗外先生」から親しくオイケンの哲学の話を聞いた荷風の感動に満ちた心の昂ぶりを映しているであろう。輝くようなロマンチズムの潤沢ある叙述である。大正三年荷風三六歳の夏のことであった。

## 二

根津・千駄木はいわば谷底の街である。昔は団子坂を下ると藍染川があり、根津に通じ私のマンション前から不忍池に至った。いまは埋められて道になった。千駄木刃の藍染川はその川筋なりに埋められたから、小径は自転車でもハンドルをとられそうになるほど極端に曲りくねっている。「へび道」と街の人はいうが、よほど性悪な蛇のようなのだ。「へび道」沿いに工事中のいくつかのマンションやアパートがある。

荷風はいう。「団子坂下から根津に通ずる藍染川の如き、かかる溝川流るる裏町は大雨の降る折といえは必ず雨潦の氾

濫に災害を被る処である。」このような川辺には洪水のあと「雨が霽れると水に濡れた家具や夜具蒲団を初め、何とも知れぬ汚らしい襦袢の数々は旗か幟のように兩岸の屋根や窓の上に曝しだされる。」

## 三

旧藍染川と不忍大通りの間はすべて路地である。

不忍大通りから根津の路地に入ったすぐのところに割烹「幸楽」がある。「東京・村上郷友会」と看板が出ていた。亭主は瀬波町の出身だそうである。店内に稲葉修の扁額があった。相変らずみな同じ形をした扁平足のような字であった。

「どこから這入って何処へ抜けられるか、あるいは何処へも抜けられず行止りになっているものか」「それはけだしその路地に住んで始めて判然する。」「表通りに門戸を張ることの出来ぬ平民は大道と大道との間に自ら彼らの棲息に適当した路地を作った」夏の夕べは格子戸の外に裸体で涼む自由があり、冬の夜は置炬

燵に隣家の三味線を聞く面白さがある」「かくの如く路地は一種いいがたき生活の中に自からまた深刻なる滑稽の情緒を伴わせた小説的世界である。」

式亭三馬の「浮世床」の挿絵の世界であり、豊国の絵本「時勢粧（いまようかがみ）」の路地である。失敗者も密通者も怠け者もみなこのなかにいた。

根津の路地は震災にも戦災にも焼け残ったから、基本的にはこんな情趣をいまも伝えている。細い路地に鉢植えが並んでいる。路地は大会の奥行の深さを示している。

旧臘十一日、官公庁のボーナス支給の翌日、生れてこの方初めて娘の馳走にあずかった。ビールを飲み脂を食ったが、脂だけでは何となく腹がおさまらないので、路地にまぎれてやきとりでもと思っ

た。  
根津の千駄木よりの路地のなかに仕舞屋風の造りの小さな酒場があった。ささくれた細かい殿格子はどこどころ棧が抜けている。白熱燈で光る行燈型の看板

に細みの達者な手で「根津の甚八」とあった。

上半分が障子の古風な表戸をそっと開けて中をうかがうと、おでんかなにかを装っていた若い女といきなり眼が合った。「お客さん悪いわね。今日は満員で場所がないのよ」

手は動かしたまま、明るい甲高い声が投げかけられた。根津のことだから大方よばよば親爺かと思つたら若い女で驚いた。

「お父さん、今日はボーナス最初のハナキンだよ」

「ハナキンとは何だ」

「なあーんだ、ハナキンも知らないの」荷風と同じように日和下駄の音を夜の冷たい乾いた空気に響かせながら、風に吹かれて次のやきとり屋に向つた。

役者の「根津甚八」と飲み屋の「根津の甚八」の関係はまだわからない。

(やぎ みつおにいがた県民教育研究所副会長)